

る。

その後、滋賀県、香川県、和歌山県で中隊を編成、渡瀨、嫩江訓練所に入所する。

昭和十八年一月、現役兵として第五国境守備隊に入隊し、七月一日、憲兵下士官教習所入隊。

昭和十九年四月二十日、卒業。

ハイラル憲兵隊勤務で興安嶺の守備に当たる。

二十年八月一日、齊々哈爾憲兵隊免渡河分遣隊所屬。

八月十五日終戦を知り、齊々哈爾に集結して武装解除の後、作業大隊に編入され列車輸送。九月二十七日に炭鉱地へ到着し採炭作業に従事し、辛酸を重ねた上、ノルマ達成をして、二十二年、引揚げ第一号と言われて帰国した。

憲兵なるが故に公職追放令にかかり、県職員も県警書記も挑戦し、試験合格後に欠格とされた。

体調を崩し二年間静養し、転々と職を求めた上、公共職業安定所の斡旋により私立病院の事務長の職を得て四十年勤務をし終えた。

現在七十八歳。健康でゴルフを楽しんでいる。

軍人一族のほまれ高い家で、二、三、四男は夭死、長男 歩兵、五男 航空兵、六男 砲兵、七男 輜重兵、八男 憲兵、と五人が全員軍務に服し、無事復員した強運一家です。

(和歌山県 林 三子雄)

## 激動の青春

島根県 塚田 信雄

まえがき

私の青春は、思い出に残る在満生活と、悪夢のように思い出したくないシベリア抑留に二分される。戦後生まれが過半数に達している今日、戦争のことは世代交代とともに風化されつつある。そこで私は、二度と戦争をしないためにも、言葉だけでなく小冊子にして数年前から、心ある人の求めに応じ配付している。そこで、開戦から抑留初期の出来事は、前三回投稿した

ので、今回は、多少改善された後半期より帰国に至るまでの状況を記述した。

#### 卒業から満州生活まで

私は旧制農業学校を卒業すると、父が運動して村役場に勤める。時は昭和十五（一九四〇）年春、日中戦争の最中で多くの若者は兵隊に取られ、役場の男子職員は四十歳以上の人たちだった。最年少のため雑用にこき使われ、面白くないが、地元のこととて一年間我慢して翌年に退職する。そして、林業関係県職員を目指し、修了後は郡内の県出先事務所へ直に採用された。その年の暮れに太平洋戦争に突入し、世は戦時一色になる。職場では、次から次へと出征し、当然のことながら人手不足となり、統制経済のもと事務量は日ごとに増大し、連日連夜の残業続きで疲労の極限状態だった。たまたま、既に渡満して就職している先輩から、適当な就職口があるが希望しないかと書状が来た。当時、満州をはじめ外地行きが流行した頃で、その主たる理由は、未知の世界への憧れと同時に、給料が内地

の二倍以上という好条件が大きな魅力であった。私も徴兵検査を二年後に控え、即、入隊を覚悟しており、その前に行ってみたいと常日頃思っていたので、直ちにOKの返事をしたことは言うまでもない。ところが、農家の長男のため父母が予想以上に反対し、加えて県主管課の人事係も、後任がいないのでなかなか退職を許可してくれない。しかしながら大陸雄飛の夢は捨て切れず、断固強行し、発令がないまま渡満してしまふ。

新しい勤務先は、北満の日本人農業学校の事務職員で、昭和十八年夏、若い胸を膨らませて赴任する。行く経路は、朝鮮半島を縦断して満州国内に入り、奉天（瀋陽）、ハルビンを経由して北方に向かい、四、五昼夜日数を要したと思う。幸い下関から新京（長春）駅までの長旅を、親切で話上手な朝鮮娘と席を隣にして、全然退屈しなかったことを記憶している。また車窓から眺める大陸の風景は珍しく、驚きと同時に期待で胸がいっぱいになる。学校は同年四月開校したばかりで、主として開拓団子弟等の職業教育を目的に国が

設立したものらしい。生徒との年齢差も二、三歳で親近感もあり、特に全寮制度で、独身者の教職員は生徒と食事を共にしていた。学校長は三十八歳、京大出の元開拓団長で人格者であったが、間もなく応召、他の教員も配属将校も含めて軍歴があり、次々と召集されて行く。事務主任も同郷で大変お世話になった人だが、僅か二、三カ月でお別れする。ところが大変、後任者がいないので同僚の女性と二人になり、会計とか対外的なことは一人で対応せねばならず、経験不足で入隊まで苦勞の連続であった。だが、時には生徒との野外実習に汗を流し、夜は隣室の若い少尉さんとよく飲んだものだ。当時の満州は内地と比較すると別天地で、配給制度とは言いながら、何不自由のない楽しく愉快な生活をしたが、ついに入隊のため二カ年の学校勤務とも別れを告げる。(付記・二十数年前から生徒諸君の同窓会には毎年招待され、今秋はさいたま市へ出席を予定している)

入隊から終戦、シベリアへ

昭和二十年三月十五日、最後の現役兵として、満州

黒河省の国境守備隊へ入隊した。そして三カ月の速成教育の後、さらに暗号教育を受け、黒龍江岸の対岸監視哨へ配属される。そして僅か一カ月くらいで日ソ開戦となり、ソ連軍が一方的に進攻してきた。敵の状況は我が方でもわかっていたので、昼夜、完全武装で監視行動をしており、命令と同時に徴発した大車(ダーチョ・荷馬車)十数台に一切の物資を積み込み、各人が満馬の手綱を引きながら後方の部隊陣地(約一三キロ)へ撤退した。この非常事態下で追われる気持ち、焦燥感というか、そのときの心境は表現できない。その後、山頂の部隊陣地で一週間くらい、空爆と黒龍江からの艦砲射撃を猛烈に受けるが、我が方は飛行機も戦車も全然出動せず、全く無抵抗の情けない状態だった。

そのうち停戦命令が出て日本が負けたと知らされたが、誰も信用しない。本部から度々伝令が来て「日本は既に八月十五日、天皇陛下がラジオで終戦詔書を読み上げ、放送された」と言う。既に一週間も経過しており、知らないのは遠く離れた山中の部隊だけで、い

かに混乱したか想像される。遙か後方の旅団司令部もソ連軍に占領されているようだし、ようやく現実感が湧き、これからどうなるかと不安いっぱいになる。

しばらくしてソ連軍による武装解除を受け、将校はトラック、兵隊は徒歩にて旅団司令部のある孫呉（五〇キロくらい）へ向かう。総勢千五百人くらいか、ソ連の警備兵に隊列の前後を自動小銃で警戒されながら丸腰で歩く姿に、かつての関東軍の面影はない。一晩じゅう一回の休憩もなく歩き続け、ようやく着く。着いた所は会社の社宅か軍の官舎が幾棟もあったが、すべての建物が略奪で荒らされて足の踏み場もない。仕方がないので二、三十人前後で分宿することになった。ところが炊飯設備がないので五右衛門風呂を代用したが、燃料が石炭で火力が強いから底は黒コゲの状態だが、他に方法がなく誰も辛抱した。ここで約二週間、関東軍が長期戦に備え長年かけて備蓄したあらゆる物資を略奪し、ソ連本国へ輸送するための貨車積みをさせられた。

九月中旬、この作業が終了すると同時に、千人単位

の作業大隊が編成され、行く先もわからぬまま約四〇キロ行進し、黒龍江を貨物船で渡りソ連領に入る。途中各地で、人馬の死骸、空爆された兵舎、道路脇に放置された車両等、終戦になって一カ月たつにもかかわらず悪臭が漂い、戦争の恐ろしさを痛切に感じた。

#### 作業大隊変じて半掘りの大隊

シベリアは起伏の緩やかな、大きなうねりのある大草原が果てもなく続き、部落と言っても三十戸前後の集落が点在し、共同で農畜産経営をしていたようだ。工場らしき建物は見当たらず、粗末な丸太造りの民家で、子供たちは素足で、着る物は汚れており、大人は老人と女性が多い。ソ連も独ソ戦で勝利したものの、若い男は戦場に狩り出され、私が入ソした当時は復員していなかったようだ。

全く先勝国の偉容は見られず、どうしてこんな乞食こじしのような国に負けたのだろうかと思つた。うっかりすると持ち物をかっぱらわれるので、監視兵は脱走兵だけでなく、自国民のこそ泥警戒も一つの任務であったかもしれない。その証拠に、隙を見て近寄って来る侵

入者をマンドリン（自動小銃）で脅している光景を度々見た。

各中隊ごとに荷車を一台持ち、各人は、毛布、飯盒、背囊、雑囊（白米、乾パン、日用品等）、水筒等を携行し、元氣なく行進する。捕虜であるため丸腰で格好はよくないが、服装は現地人より立派である。この年は開戦以来雨が多くて、シベリアも同様らしく、道路はあつても泥んこで歩けず、かえって道路脇の草むらが歩きやすく、荷車は使用できず二、三日で捨ててしまった。飲み水など望むべくもなく、溜り水を飲んで歩いたが、よくぞ腹痛を起こさなかったと思っ

ている。  
入ソして間もなく凹地で大休止していると、突然所持品の検査が始まる。相手は完全武装のソ連兵（無教育不正規兵約三十人）で、「検査」と称し、目ぼしい物を没収するのが目的だ。お陰で時計、万年筆等の貴重品、筆記用具に至るまで一切強奪され、以降二年間くらい文字を書く機会がなかった。僅かの携帯食糧も底をついたころ、最初のコルホーズに着き、収穫期の

ジャガイモの掘り取りをすることになる。ソ連軍からの糧秣はなく、岩塩だけ支給され、主食は芋のみ。煮たり焼いたりして食べたが、だんだん鼻につき嫌になる。そこで生活の知恵で、煮た芋の皮をむき、飯盒の中で丸棒でつき餅のようにしたり、警備兵の捨てた空缶の底に無数の穴をあけ、ジョレンの代用品を作る。そして生芋をすり、水団すいだんにして食べると変わった味がして、少しでも加工するとどうにか食べられた。日本でも北海道産は味が良いと言われており、寒い大陸性の地方はうまいらしいが毎食となると別だ。しかし他に食料がないから仕方がない。

孫呉を出發する時はまだ良かったが、日一日と寒さが近づくのが感ぜられ、野宿のため各自携行の毛布を天幕代用とし、残りの毛布で体を寄せ合って就寝する。大陸の氣候の特徴は、日中は日本と大差ないが、夜になると急激に冷え込むから寒くてなかなか寝つかれないので、木の枝、乾草等燃える物を集め、焚き火しながら朝を待つ。夜明けと同時に水を探し湯を沸かして、残した乾パンで形だけの朝食をとり、芋掘り作

業に行くため集合する。

ジャガイモ畑は、一区画約二〇〇ヘクタールくらいあり、横一列に並んで木のヘラのような物で掘り出して、柳条で作ったカルチンキ（大きいザル）に芋を入れて、二、三〇メートル間隔に集積して、大型トラックが入った時に積み込む作業工程である。だが、穀物はなく毎日芋だけの腹べこ生活で、働く気力も体力も全くない。しかし、作業ノルマがあるので、人に遅れないようにするには前進のみで、茎の半分が芋が残っても仕方がない。ソ連人の監督が見つけると怒るが、広いので目が届かない。このように二、三日野宿して一つの部落が終わると次の部落へ移動してまた芋掘り。時にはキュウリ、トマト、ニンジン等の収穫に行くこともあり、よく盗んで腹の足しにかじったものだ。平素芋だけの食事だから格別の味で、大豆畑に行った時は監督の目を掠め、軍衣を広げ大豆を入れて棒で叩き、殻は風で飛ばし豆だけ集め、ポケットいっぱい持ち帰り明日の食料にした。そしたら食べ過ぎて下痢する者が続出し、各自野糞の回数がふえ、踏んづ

けて困ったこともあった。

幾つ目かの部落で、やっと木造の倉庫らしき屋根のある建物に泊まることになったが、電灯はもちろん便所などあるはずがなく、夜中畑の中で用を足している、黒豚がブブウ言いながら近づき、片手で追ってもなかなか逃げなかった。

シベリアの秋は九月だけで、昨日までついていた木の葉も今日は散り、十月に入ると木枯らしが吹き、粉雪がチラチラすると寒い冬の到来を思わせ心は淋しくなる。既に二十日以上も芋掘り作業の連続で、いつごろシベリア鉄道に乗りかえ帰国できるだろうかと不安な毎日であったが、ようやく炭鉱の街ライチハへ着く。線路脇でガタガタ震えながら貨車の到着を一晚じゅう待たされたが、一、二時間くらいでシベリア本線のブレイヤ駅に着いた。これまで長い道中、監視兵たちも「ヤポンスキー、東京ダモイ」と常に言っていたので、ここで列車に乗り換えて、ウラジオ経由で帰国できるかと思うと嬉しくなり、みんなも急に元気になる。その後、人員点呼が終わり出発すると、だんだ

ん駅から離れて行くではないか。貨車が入るまでどこかで待機するのであろうと思ひ歩いたが、先頭はいつまでもとまらない。そして、横幅約五〇〇メートルくらいの大きな川が見え、引込線が並行し、線路は何年も使用した形跡がなく、レールは赤錆びて枕木も大分痛んでいるようだ。さらに進むと、川の左側に小高い山が現れ、崩されて採石場らしき所が見えるではないか。ここへ来てやっと気がつき「コリヤ大変だ、ここで働かせるため連れて来たのだ」と愕然とし、帰国の夢は消える。

石切りから露天掘り炭鉱へ

ブレイヤの閉鎖により、我々約五百人は昭和二十二年春、大型ラーゲリ・ライチハへ移動した。ラーゲリで我々を迎えたのは『日本新聞』で感化した民主運動であり、赤旗と労働歌の波で急激な環境の変化にとまどいを覚える。ここライチハは炭層に恵まれ、数十キロ四方石炭が無尽蔵と言われ、石炭で生活しており、極東地方有数の炭鉱街であった。ラーゲリの規模も一万人以上といわれ、所内には総合病院、集会場、演劇

場、バザール、理髪店等の設備も、大規模ラーゲリなればこそ整っている。その反面、民主運動は極端に進み、旧将校、憲兵、警察官、特務機関員等は反動分子として大衆の面前で名指しで吊るし上げを食ひ、挙げ句、不本意ながら自己批判をさせられる。我々の中のアクチーブと称するものが、選抜されてハバロフスクの前衛学校（共産主義教育）で一定の期間、速成教育を受け帰ってくる。そして我々を指導する立場で中隊長より威張っている。

住む建物は半地下方式で、丸太合掌造り、薄板で覆い、その上に土を盛り、所々に煙突が出ており、燃料はすべて石炭である。私たちは二十五人単位の作業班を編成し、日曜日以外は班ごとに前後に警備兵がつき、朝七時半に出発して夕五時半ごろ帰ってくる。作業の内容は、炭面清掃（表土除去後の残土処理）と線路横行（ヨッコウ・枕木をつけたままのレールをバールを使い、班長の号令一下、人力で移動する作業）が炭鉱の主な仕事である。しかし、この重労働は、食糧不足で体力のない私たちにとっては心身ともに疲労が

極限に達し、特に酷寒期は着慣れない防寒装備で重くて体を動かすのに苦勞した。

技術的なことはソ連人がやり、採掘する機械は蒸気式パワーショベルカーである。よく見ると日本製で神戸製鋼のプレートが貼りつけてあるから、満州の撫順炭鉱あたりであらゆる機械を強奪し、シベリアまで運んだものだろう。我々の仕事は雑役で、ショベルからこぼれた土とか石炭をすくいやすいように箇所ごとに集めたり、貨車が度々入るから掘る方向に線路を移動させる仕事だった。労働はソ連人も共に働き、冬の暖房用にと、石炭を夏でも南京袋に少しづつ入れて担いで帰ったものだ。彼らも同様で、その日暮らしが身につき毎日の習慣になる。

ラーゲリに大浴場があり、石炭が豊富なため再々入浴ができた。ブレーヤ時代初期は半年くらい体を洗うことなく、下着の交換もなかった。そして虱が大発生し、毎晩のように下着を脱いで虱退治したことが夢のようだ。そのうち、食料の支給がよくなると同時にノルマが厳しく要求されるようになり、達成率によって

増減に影響するから、やむなく他の班と競争しながら働いたものだ。

休日には野外演劇場で音楽会、演芸会、相撲大会、盆踊りなど盛んに行われるようになる。芸は身を助けるの言葉どおり、青木洗一さんなどはソ連当局から許可され、芸能活動に専念しており、時々歌謡ショー鑑賞の機会があり羨ましく感じた。ある晩、天然色映画が上映された。「石の花（カーメンツベトク）」という題名で、初めてカラー映画を見たが、当時日本でも白黒の時代だったからびっくりした。

ラーゲリの隣にサナトリウムがあり、ハラシヨラポータ（よく働く労働者）は二週間以上の休養が与えられていたようだが、我々にはあまり恩恵がなかった。

また、ハバロフスクの日本新聞社から洗脳のため新聞が定期的に配付されるようになり、その都度アクチーブ活動が活発化し彼らが巡回してくる。そして、レーニン、スターリンを崇拜し、共産主義社会を殊さら賛美し、「我等ソ同盟こそ祖国だ」「ブルジョアとプ

ロレタリアの階級闘争に立ち上がれ」とか、気の狂ったようなスローガンやら、壁新聞をベタベタ貼りつける。その晩、一日の労働が終わって夕食後学習会が行われるが、参加しないと反動分子となり、帰国の障害になると思うからこそ、疲れた体に鞭打ち、形だけの学習を受けた。

作業当日は現場で昼食をするので、班から一人炊事係が必要になり、指名が困難だから公平にするため選挙になり、なぜか私が当選する。早速、翌朝から炊事場に行き食材を受領した。内容は、人員分の黒パン（一人当たり三〇〇グラム）とスープの材料（乾燥野菜、ジャガイモ、魚肉類、調味料）等である。そして、現場の休憩小屋でパンの分配とスープ作りと後片づけが仕事であり、神経は使うが肉体的には楽で帰国まで続いた。

また中隊の給与係に選任され、日本の祝日に糧秣が特別支給されると、その都度、感謝のアジ演説をさせられる。さらに食料の質量とも次第に改善され、その上、班の作業成績によって現金をくれるようになり、

現場作業をしない私まで平等で、多少引け目を感じながらもありがたく頂戴した。我々には金銭欲は全くなく、ただ食欲だけで、早速マガジンで量の多い駄菓子系の物を求め、満足するまで食べた味は格別であった。煙草も支給されるが、マホルカと称し葉茎を乾燥、小さく切断し叩き碎いた粗悪品だが、喫煙者はありがたくそれを古新聞で適当に巻き吸う。辛くて味は良くないが仕方がない。ソ連の労働者も同様で、彼らも給料日は奮発してバピロース（吸口の長い葉巻煙草）を買い、我々がねだると気前よくくれた。このように抑留生活にも慣れてきたが、郷愁はますます強くなり、春に秋にデマ情報が飛び誰も信用しなかったが、いよいよ現実のこととなる。

夢に見たダモイ・ヤボン

昭和二十四年七月中旬、待ち望んだ帰国命令がいつに出で、運よく第一回目の名簿に載り喜び勇んでライチハ駅へ行進する。沿道には多くの市民が立ち並び、女性など、涙を浮かべていつまでも手を振りながら送ってくれたことが印象に残る。

帰国列車は有蓋列車（六〇トン）で約三十人詰め込まれ、千人単位で編成され一路ナホトカ港に向かう。ソ連では、すべて物資は鉄道輸送らしく、五十車両以上連結して猛スピードで走っている。我々の列車は臨時便か、一旦停車すると何時間も動かず、ある時は朝発車して午後二時ごろまで停車しないこともあり、不規則この上ない。だから食事の時間もいつのことかわからず、数車両、食堂車を連結しているようだが、停車しないと食事も用を足すこともできない。しかし誰も愚痴を言わず我慢し、心は既に故郷へ飛んでいる。他に話すことがなく、まず食べ物の話、家族のこと、思ひ出話、そして敗戦後の日本と、帰ってどうなるかと話に花が咲く。シベリアは広く、走れど走れど草原が続き、ときたまコルホーズらしき部落が点在するだけで特に変わった風景もなく、停車した時は全員草むらで用を足し、食事の分配を受ける。そのうち次第にナホトカに近づき、沿海州の森林地帯に入り長いカラマツ林、白樺の原始林を通り抜け、出発して三昼夜くらいで待望のナホトカに着く。この港は山が海岸に迫

り大きな建物はなく、田舎の小さな港町の感じで、波止場近くの浜辺には急造のダモイ用と思われる建物が立ち並んでいる。集結地ナホトカは、シベリア各地から集まった帰還者で溢れ、遠くはウクライナ、バイカル湖周辺から、一カ月近くもかかって着いたとか、大変な人の波である。ここで引揚船が入港するまで、軽作業と共産主義教育を受けながら待機したが、その一日の長いこと、体験者でなければわからない。

一週間くらい待ってやっと入港し乗船すると、船員さんや白衣の看護婦さんに「長い間ご苦労様でした」と温かく迎えてもらい、嬉しくて涙が出た。特に日本女性と対面するのは五年ぶり、大柄なロシア人を見ていたので小さく感じたが、すごく美人に見えた。そして桟橋が外され錨を引き揚げる音がすると、ポーツという汽笛が長く聞こえ「本当にこれで日本に帰れるのだ」と乗船してやっと実感が湧き胸いっぱいになる。

「シベリア抑留、永遠にサヨナラ」と船は静かに岸壁を離れ、日本海に出ると赤い夕日が海の上に輝き奇麗な夕焼けとなった。明日、いよいよ舞鶴港に上陸で

きるかと思うと、嬉しくてなかなか寝つかれない。航路位置は日本海の真ただ中か、夜はかなり揺れたが、気持ちのものか、船酔いする者はいなかった。翌日の朝食、昼食は久しぶりの日本料理で、白く光る米飯、野菜と魚の味は格別であり、何年も食することがなかったから、味わうこともなく瞬く間に胃の中に入る。昼食後の「日本が見えたぞー」の一声で全員甲板に上がり、「万歳」と叫ぶ者もおり、船内は沸き返る。さらに地平線の彼方を見ると、長く横たわった日本の陸地がだんだん近づき、誰も彼も涙また涙で船室に降りる者はいない。次第に風景もはっきりし、山の樹木も見え、船は静かに舞鶴港に入港した。栈橋には婦人会をはじめたくさんの人たちが、日の丸の小旗を振りながら盛大に出迎え、感激の上陸をした。そこには初めて見るMPの姿があり、日本はアメリカに占領されているのだ、これからどうなるかと国内情勢が全然わからないから不安になる。落ち着くところは旧海軍の兵舎で、入る前に頭からDDTの粉剤をかけられ、携行品を整理して、お湯たっぷりの大浴場で手足を伸ば

し、生まれ変わったような気分になり、やはり日本人は入浴でなければ駄目だと思う。

それから四、五日逗留し、健康診断をはじめいろいろの手續きを終え、それぞれの故郷へ、長い間苦業を共にした戦友と別れ出発する。まず慰勞金二千元と、下車駅までの乗車券をありがたく頂戴する。そして、久しぶりに日本の列車に乗り田園の風景を眺めると胸いっぱいになった。途中各停車駅では、白いエプロンをかけた婦人会の皆さんが日の丸の小旗を振り、「長い間ご苦労様でした」の言葉とお茶の接待まで受け、感極まる。後で聞くとところによると、前年までの復員者はそのような歓迎はなかったらしい。

ようやく島根県に入り松江駅に到着する。ここでも大歓迎で、婦人会に女学生まで加わり、びっくりした。さらに県庁の担当者から丁重な挨拶を受け、隠岐の人も泊まり宿舎も予約してあるから泊まって疲れを落としてくださいとの言葉に甘え、一度はホームに降りる。ちょうどその時、村役場に勤める弟が突然現れ、その個人的行動は一切できないと。なぜなら、駅

頭でも村でも歓迎準備をしていると言う。それでは仕

方がないので、県の方には丁重にお断りする。案の定、駅前でもたくさんの人が集まっており、びっくりしながら帰国の挨拶をした。また地元の村議会議長さんが自らタクシーを用意し、わざわざ迎えて下さり恐縮する。さらに、村役場前でも歓迎準備がなされており、出征軍人と同様で驚いた次第である。そして我が家でも部落員総動員で、父母、弟妹も心配しながら待ちわびていたから大変に喜んでくれ、感動的であった。当夜の祝い酒、田舎料理の味は格別で、シベリア抑留生活を振り返りながら、生きて帰ることができて本当によかったとつくづく思った。

この日は、昭和二十四年七月三十一日である。ところがその当時、全国的に共産党活動が活発な時期で、早速翌日、党員の訪問を受ける。彼等は現状を説明し入党を再三勧誘したが、父が猛烈に反対したので私もやむなく辞退した。

最後に、シベリアの極寒の地で無念の死を遂げられた戦友の皆様のご冥福を衷心よりお祈りいたします。

### 【執筆者の紹介】

現住所 鳥根県大田市大田町

入隊前の略歴 昭和十五年三月 県立仁摩農学校卒業

昭和十五年四月 鳥根県職員に採用

昭和十八年三月 北満日本農業学校

就職

昭和二十年三月 黒河省国境守備隊

入隊

昭和二十年八月 独立混成七九八大

隊

昭和二十年〃 瓊瑋県西山で武装

解除

昭和二十年十月 ブレーヤ、ライチ

ハ収容所

昭和二十四年七月 舞鶴港上陸、復員

復員後の略歴 昭和二十六年四月 鳥根県職員に採用

昭和五十八年三月 県職員定年退職

平成四年七月 シベリア墓参団に

現在

参加

平成七年から全抑協大田市支部長と県連合会副会長の要職に任命され、会員の指導と会の運営に最大の協力をいただき、活躍をされておられます。

(島根県 本田 吉則)

## シベリア抑留記

岡山県 片山 衛 真

### 最後の戦闘

昭和二十(一九四五)年八月十三日、斬込隊に一番に志願したが、西森班長は貴様は殺さぬと小声で話した。どうせ戦死していく身、生きていれば日本のこと、故郷のことを思う。時には苦しむこともある。戦死してしまえば楽になると考えた。軍国主義教育において忠孝一本、親孝行は国に命をささげることであり、国のために戦っていくことが日本男子の本懐であ

る。私たちは、戦死していくことが至上命令であり、天皇守護に散ることを信じ戦った。興安嶺の山頂において幾日も戦車の進入を防ぎ、歩兵部隊の進入も許さなかった。日本軍対戦車、連隊砲、速射砲、九十野砲は敵戦車により使用できず、毎日六十人の肉攻隊員により進入を防いでいた。肉攻隊、肉で攻めるダイナマイト十キロ入った木箱であり、人間と共に敵戦車に飛び込んで行くのだ。夕刻我々の陣地より出発して行った。全員二十歳の若者たちであり、日の丸の鉢巻きをし銃も手榴弾も持っていない。ダイナマイトの木箱のみだ。一杯の酒を交わし出発して行く。話す者はいない。彼らは数時間後には戦死するのだ。顔色も無く、姿も人間とは思われない人形のような。生きて帰れば銃殺刑が待っている。必ず死んで行く彼らである。私も今日の日が分らず彼らを送るのに悲しみを感じることはなかった。山頂においては銃撃戦である。谷間を通る軍用道路は敵戦車が進撃して来るが、双方共進入を防いでいた。

十四日、戦友が、肉攻隊員に指名された。彼は近視